

## 中國の分家制度と「家」の性格（中）

内 田 智 雄

分家股間というよりやゝ擴大せられた關係で、同族一般というより遙に限局せられた血縁集團は、一般の族譜家乘の類では支派あるいは支房などと稱されているが、われわれの調査地域においては、「門」とよぶものが比較的によく、またその血縁的小集團の聚居する村落名や、村落内の地域名を付したり、地名を姓の上に冠してよぶものもすくなくはない。たとえば「上坡子李家」とか「南胡同李家」とか、「東李家」とかとよばれるものも、また、單に「南院」とか「北院」などとよばれるものもある。しかしながらこれらの同族も、また従つてその支派も、すくなくとも華北の農村においては、その規模が一般に小さいことをもつて通例としており、華中や華南の族譜に見られるが如き大規模なものは、殆んど稀有であることに留意する必要がある。そしてこれらの「門」その他の呼稱をもつ支派支房の内部には、血縁の親疎に應じて「五服」とか「出五服」とかの區別を存し、それがまた吉凶慶弔のいわゆる「紅白事」や、喪服の上などに差等を付するとともに、またそれに應じて「家裡」とか「近門」とかと、呼稱上の區別もまた存するわけである。しかしながらこのような「五服」の内外によつて區別せられる血縁關係は、生存者の世代（輩）の變化——具體的には降下——とともに變移する親等差を基調とするものであつて、同族内の恒常的な血縁關係を示すものでは決してない。しかるにこれに反して、支派支房の如き血縁的な構成は、「五服」の内外によつて區分せられるものよりその範圍が大であり、かつその區分の基礎とせられるところが、生存者の世代を基準とするものではなく、同族の遡源的な血統關係に存しているため、それは世代の變移にかゝわらない恒常的かつ永久的なものであるという

ことができる。加之、このような支派支房というものは——同族そのものもまた然りであるが、さらにその狭小な範圍において——過去と未來に亘る分家股の歴史的な統集によつてなり立つものであり、かつまた分家行爲に伴う異居別財の生活が、新屋の建築や疎隔せる土地への分散分居によらずして、従前の「家」が同居同爨の生活を営みきたつたその舊屋を、そのまゝ分割することによつて行われることが多い關係上、かゝる支派支房はまた住居の上でも、即ち血縁的な關係は同時に地縁的な關係においてもつながりをもつことが多いのであつて、いまその典型的な例を欒城縣寺北柴村の諸姓に求めてみるとすれば、郝姓の五十三戸は南院・北院・西院の三院と、南院から分出した數戸と、院の新屬不明なもの二戸とよりなつており、そしてこの南・北・西の三院の名稱は、郝姓が同村で聚居している方位によつて名付けられたものであり、またその聚居の狀況は、同村の保甲番號の編成の上にも見ることが出来る。即ち六甲二戸より六甲七戸までと、七甲一戸より七甲四戸までと、十甲四戸より十四甲十一戸までのうち、十四甲十戸の劉姓たゞ一戸を除くのほか、他は悉く郝姓である事實に徴しても知ることができる。また同村の徐姓二四戸は徐家街とよばれる地域に、保甲番號では七甲五戸から九甲八戸まで、實に一戸の例外もなく連續した保甲番號のうちに聚居しており、また劉姓二〇戸も三甲と四甲とに、趙姓一八戸は一甲と四甲から五甲にかけてそれぞれ聚居しているわけである。そしてこのように同族が聚居の傾向をもつこと自體は、同族數の多少を超えて一般的であると稱し得るけれども、村落の内部や村落を跨つて聚居する同族が、その聚居する地域ごとに必ずしも支派的集團を構成しているわけでは決してなく、特に支派的集團そのものが、同族數の比較的にすくないものには、殆んど存していないにおやである。いまその實例を主要調査村落に求むるとすれば、欒城縣寺北柴村の郝姓においては、南・北・西等の「院」に分れていること上記の如くであり、また同村の趙姓一八戸は、第一門第二門第三門の三つの「門」に分れているが、これが本村において支派組織を有するたゞ二つの姓であつて、他姓には全然これを存しないのである。また、順義縣沙井村では一五姓七〇戸を算するけれども、一姓として支派組織を有するものがなく、昌黎縣侯家營は一三姓八

四戸を擁するけれども、たゞ侯姓のみがその支派組織を有するにすぎず、良郷縣吳店村では、一六姓五七戸のうち一姓として支派組織を有するものがない。山東省歷城縣冷水溝壯の李姓は、村内に實に百數十戸の多きを算し、そしてそれは「五李」即ち五つの李姓に分れているといわれるけれども、その中には明らかに不同宗の李姓が含まれており、従つてこれを五つの支派から組成されているとは目しがつたいようである。また恩縣後夏寨では王姓の四七戸を筆頭として、一〇姓一二三戸を有し、そのうち王姓のみが「東胡同王」・「西胡同王」などと、その聚居の地域に應じて區別されているものの如くであるが、これが直ちに支派であるとは見做しがたいと思われる。

以上われわれの主要調査村落における同族について、その支派組織の有無とその態様とを概観したのであるが、これによれば支派組織を有するものは、一般に農民によつて「大戸」とよばれている富裕な大族においてゝあつて、少數な同族には存しないことをもつて通常とするが、大族であつてなおかつ支派組織を有しないものの存することは、上記の諸例によつても知られる如くである。要するに華北農村に關するかぎり、同族内に支派組織を有するものが比較的寡少であるといわざるを得ないが、おもうにそれは後に見る如く、中國の家族制度、特に分家制度の本質に由來するところのものであつて、従つてその意味では華中華南の名もない同族においても、華北のそれとほゞ同様であるということができると思われる。然るにわれわれは同族とせば、たゞちに華中華南における大規模な、そして整然たる同族組織を想起するのであるが、それらはいずれも族譜家乘を付印するが如き大族であつて、名もない農民のそれとは歴史的にも經濟的にも社會的にも、その條件を基本的に異にしているわけである。従つてこのような諸條件に裏づけされない一般の羣小同族は、確然たる支派組織を有しないことをもつて通常となし、そしてそれは中國の家族制度、特に分家制度そのものに胚胎するものであることは既述の如くである。

然らば華北農村において比較的に寡少とみられる同族内の支派組織には、どのような組織があり、また如何なる機能を演じているであろうか。いまその代表的なものについて、まづその支派組織の態様をみるに、樂城縣寺北柴村の

郝姓五三戸は、南・北・西の三院と、南院から分出した數戸と、院の所屬不明なもの二戸とよりなつており、これら三院にはそれぞれ「家族長」とよばれるものが一人づゝあるが、それはもちろんその院の最高世代中の最高年者であつて、その死亡とともに同じ原則に従つてつぎの家族長ができる。そしてこの三院の三人の家族長のうち、最も輩(世代)の高いもの、そしてもし最高輩者が二人以上ある時には年齢により、もしまた年齢が同じ時には生年月日の古い者が、全郝姓の族長となることとされている。しかしてこれらの家族長が、それぞれの院における機能として一般的にあげられるものは、各家族における不和の仲裁や分家の立會い、過繼子や土地賣賣の保證人、吉凶慶吊の際の指揮などであるとされているけれども、實際には全郝姓の族長である郝順成なるものによつて行われることが多く、従つて各院の家族長による上記の如き機能は、族長に比して遙かに消極的であり、また不定的であるといわなければならぬと思う。そしてこゝで不定的というのは、家族長の人物や能力の如何によつて、上記の如き機能が演ぜられたり、無視されたりすることがあるという意味である。また本村の趙姓の三門には、郝姓の家族長に相當する「門家長」が一人づゝあり、その三人の門家長の中の最高輩者が族長となることは郝姓のそれと同様であり、門家長の演ずる役割や機能といったものも、また郝姓と大差ないものと見て誤りはない。また昌黎縣侯家營の侯姓八四戸は、老大一門(または單に大一門ともいう。二門三門についてもまた同じ)・老大二門・老大三門の三門に分たれ、老大一門のみがさらに三門に分れ、それを小一門・小二門・小三門とよんでいる。いま各門において既に離村せるものを含めてその戸數をあげれば、老大一門の小一門が二十數戸、小二門が十數戸、小三門が三十數戸で、計七十餘戸を算して絶對多數を占めており、老大二門は僅々二戸、老大三門は十數戸となつている。そして侯姓の古老のひとりには、これらの門の下にはいくつかの「支派」が存していると語つていなければならない。その支派なるものは頗る明瞭をかいでおつて、要するに本村の侯姓は三門に分たれ、大一門のみがさらに三門に分派しているというのが、ほゞ確實なところではないかと思われる。そしてこれら三門のおのには、輩大的としての「支派長」を存しているけれども、その名稱に伴う特別な

機能は存していないものゝ如くである。また欒城縣寺北柴村の東南一軒半ほどの所にある聶家莊は、全村戸數二四三戸のうち、聶姓が實に一八八戸の多きを占め、それが大門と二門との二門に分れてゐるけれども、第二門は僅かに二、三戸にすぎず、他は悉く第一門によつて占められてゐる。かくの如く聶姓二四三戸は二門に分れてゐるけれども、聶姓全族としても、また二門それぞれ別個としても、なんら特記すべき同族的な行事をもたず、族長もまた單なる名目的な存在にすぎず、格別な機能も職務も有していないといわれているからして、二門のそれぞれの支派長にこれといったことのないのは寧ろ當然と云ふべきであらう。

以上がわれわれの調査村落において、同族内に支派的な集團として、確然たる組織をもつ最も代表的なものといふことができる。これによつてわれわれは、中國の農村、すくなくとも華北農村においては、同族内に支派的組織をもつものが、一般的に如何に寡少であるかを推知することができると同時に、従つてまた支派集團としての獨自行事や、特別な結合關係をもつものが、如何に稀有であるかも窺知することができると思う。たゞひとつ上記の事例においては、欒城縣寺北柴村の郝姓の西院と南・北二院とに、特記するに足るひとつの行事をみることが出来る。即ちそれは郝姓同族の支派集團であり、同時にまたそれにもとずいて地域的にも村落内で聚居してゐる西院と、南院及び北院とにおいて、それぞれ別個に行つてゐる祖先祭祀の行事と、及びそれにまつゐる若干の事項とである。郝姓五三戸は前記の如く、本村内で聚居するその地域にしたがつて、南院・北院・西院などとよばれてゐるが、彼等は毎年舊曆三、四月の頃に訪れる清明節に、二派に分れて共同の祖先祭祀を行つており、これを彼等は通常「清明會」・「郝家會」・「父子會」などとよんでいる。そしてこの清明會は、南北二院が合同してひとつの「會」をもつのに對して、西院はまた別個にひとつの「會」を營んでゐるのであつて、かく郝姓が分れて二つの清明會を行う理由を、西院の郝姓の一人は次のように述べてゐる。「昔、郝姓が本村ニ移ツテキタ後（明ノ永樂初年ニ、山西ノ洪洞縣カラ移住シテキタト

イワレル)、兄弟二人が分家ヲナシ、老祖地ヲ二ツニ分ケタ。ソシテ今、祖坟(祖先ノ墓)ノアル土地ノ半分ノ二畝ガ自分タチ西院ノ所有トナリ、隣接ノ二畝ガ南・北院ノモノトナツタ」と。これによれば、郝姓の清明會が二つに分れて行われるのは、その遠祖において二門に分れたことに由來することとなり、従つてまた現在のように南・北二院に分れているのは、その後においてその一方がさらに分派したことによるものということになる。

まづ西院の清明會についてみるに、この「會」に屬するものを「會員」といふ、會員の數は七戸とも八戸ともまた一戸ともいわれて、その正確な數は明らかでないが、とにかく南・北二院の方が壓倒的に多數を占めていたのであつて、これを農民は「昔分レタ二人兄弟ノ一人ノ方ガ繁榮シタカラダ」と説明している。そして西院には前記農民の言の如く、現に二畝の祖坟地を有していて、これを「郝家會裏地」あるいは單に「會地」とよび(爾後これを單に「會地」とよぶこととする)、これを會員のひとりである郝小小なるものに十年程前から小作させているが、彼は所有地五畝という極貧農のひとりであつて、これがまた彼をして會地の小作をなさしめ、十年に及ぶ長期間小作を繼續せしめてゐる最大の事由であると思われる。この會地の小作形態は、この地方のいわゆる「捐地」即ち分益折半の小作であり、従つて彼はその收穫の半分を郝家會に納め、他の半分を自分の取得とするわけである。會地は粟・麥・高粱などに適し、この地方の主要作物たる棉花には適しないが、とにかく作物は彼の隨意とされており、收穫の際には、西院の家族長である郝洛振が會地に出向き、前もつて郝小小によつて均等に二分せられている一方を指定し、これを郝小小として郝洛振の家にまで持參せしめ、毎年清明節の五・六日前に、郝家會の會員中の二名が縣域内に賣りにいくこととされている。因みに民國三十年度には、郝小小が粟一石を納入したので、それを賣つて九元餘の金を得たといわれている。

清明節における西院の郝姓の祖先祭祀には、大人も小供も朝早く集り、焼紙・線香・酒・マントーなどの供物をたずさえて坟<sup>はか</sup>にいき、大輩(即ち上輩のこと、こゝでは西院の家族長をさす)が一同の前に立ち、晩輩(即ち下輩のもの)が後

にならび、大輩が紙錢を焼き線香をたいて叩頭をすると、それにならつて一同が叩頭することとなつてゐる。そしてこの晩輩の中には、もちろん男女の子供たちがいるのであつて、子供たちは「ソノ時供エタ四兩(約三十匁)ノマントーハ、喰ベルト吉利デアルトノ信仰ガアリ、ソレヲ貰イニクル」ためだといわれ、それ故マントーは、豫め人數に不足しないように用意せられる由である。上坂<sup>はかまじり</sup>がすんで一同が村に歸ると、清明會で「大頭」とよばれる家族長の郝洛振の家で「吃會」即ち會食を行うのであるが、これに出席しうるのは十五歳以上の男子に限るとされている。そしてかく吃會の出席者が男子に限られるのは、女子の「嫁シテキタ者ハ外姓デアリ、村ノ娘モマタ外姓ノ者ニナルノダカラ」といわれ、婦女の出席はかく拒否されている。吃會の席次は嚴正に論輩、即ち輩の大小によつてきめられ、同輩二人以上存する時は年齢によつて分けられ、年齢同じ者が二人以上存する時には、出生月日の前後によつてきめるといわれ、かくの如く論輩即ち世代を規準として席次が決定せられるため、往々にして年齢の若い者が上席を占めるということも生ずるわけである。かくの如くこの吃會は婦女を完全にしめだして、老若の男子と子供たちのみによつて行われ、従つてこの會が父と子によつて構成されるところに、この會が「父子會」とよばれる理由も存している。かくて一同が着席すると、食事にさきだつて郝洛振から會地の收穫とその賣却の經過、後述する會錢の集金狀況と、上坂及び吃會に要した費用の清算、殘餘の會錢の多寡やその處理などについて報告がなされ、それからいよいよ會食が始まることとなる。そしてこの會食の資金は、會地の收穫の賣却によつて得る金と、會員各戸から據出する分擔金その他をもつて充當することとされているが、各戸から出席する人數の多寡に應じて、會としての負擔金は必ずしも同一ではないわけである。しかしこの點に關しては「同族ダカラ差支ナイ」ともいわれている。もつとも各戸から出席する人數は、豫め會に届け出る要があるとされているが、會食に供される食料の品目と數料とは、毎年ほぼ同一とされており、民國三十一年には、肉四斤で四元、酒二斤で二元、粉皮<sup>そうめん</sup>半斤で三毛、粉條<sup>まめそうめん</sup>は二毛、醋<sup>す</sup>半斤で五分、醬は五分、香油<sup>ごまあぶら</sup>は五毛、白菜は五斤で五毛、鹽半斤で八分、蒸餅二十斤で三元、豆腐一斤で一毛、葱は一毛、菓子<sup>かし</sup>は二毛、

芥花<sup>かじ</sup>は五分、爆竹<sup>はなび</sup>は一元というように購入せられており、他に會地二畝の錢糧(田賦)六毛を納めたといわれ、合計十三圓に近い支出をみているが、これに對して會地からの収益は、前記の如くその賣却金が九圓餘であるために、不足額は會員各戸の分擔金と、及び次にみる清明會の基金の利子とによつて充當しているようである。

この清明會の有する基金が如何にしてできたかということは、この會の成立事情を知る上に興味のある問題であるが、われわれの調査のかぎりでは、この點を具體的に明らかならしめる資料がない。しかしとにかく民國三十年には、この會に二十四圓の基金があり、それ以前については郝洛振の保管する帳簿によつて、その若干を窺い知り得るにすぎない。

しかしてその帳簿には二部あつて、そのひとつには「郝家清明會立」と表記してあり、他のひとつには「西街郝家會賬 民國二十一年貳月貳拾九日立」と表記してあるが、いずれも清明會の會錢運營の帳であることは、その記載内容からして明らかである。即ち前者には民國二十年前の年次不記のもの二項と、民國二十年二月十九日現在における貸金の額と借主とを記した一項と、一躍して「民國三十年存 郝家會存洋 拾元〇八毛」という總計が記されており、後者には民國二十年前と思われる年次不詳のもの一項と、「民國貳拾壹年貳月貳拾九日過賬」と書かれた一項と、「民國貳拾五年參月拾四日立」の一項とのみあつて、その後のものが全然記載されておらない。そして兩者とも開帳第一項には、清明會の會食に供する食料品名と、その斤數及び價錢が記されておつて、これは清明會には毎年一定品目を、一定量一定額買うことを示すものであり、また會に二部の帳簿を存するのは、舊時は小さい方の帳簿即ち「郝家清明會」の方を用い、後になつて大きい方の帳即ち「西街郝家會賬」を用いるようになり、そしてそれは民國二十一年二月二十九日(おそらくは清明節、またはその前後)に、「過賬」即ち帳簿の寫しかえがなされたものと思われる。そして廢棄した帳簿に結末をつけるために、民國二十年からとんで民國三十年に到り、當時の現存金の合計十圓八錢を記入したものであろう。また後の「西街郝家會賬」の方にも、民國二十六年以後の記載が全然見當らないが、それ



は以後清明會が行われなかつたわけでも、また會錢の利息の取立てが行われなかつたわけでもなく、それは次のような事情によるものである。

去年（民國三十年）ハ各戸カライクラ集メタカ——帳面ニツケナカツタカラ覺エテイナイ。

ナゼ帳面ニツケナカツタカ——臨時ニ紙片ニ書キ、會食ガスンデカラ棄テテシマツタ。

書キ殘シテオク必要ハナイカ——ナイ。

と、帳簿の記入者であり保管者でもある郝洛振が述べていることによつて知ることができる。

然らば次に會の基金は如何に運營せられているかというに、民國三十年度に會の基金が金二十四圓であつたことは前記の如くであつて、その金は次のような人々に、下記の金額において貸出されている。即ち「郝老紀 一元、郝金 一元四毛、郝小小 三元八毛、郝老化 二元五毛、郝老振 五元、郝個半 六元八毛、郝春 一元五毛、徐老固 二元、トイウヨウニ貸シテイル」と。以下これについての質問應答を若干付記すれば、

皆利子ヲトツテイルカ——一ヶ月百圓ニツキ三圓、十ヶ月一年ノ勘定デ年三十圓。

ソノ利子ハ何時集メルカ——毎年清明節ノ時ニ集メル。

ソレラハ皆民國二十五年三月十四日ニ貸付ケタノカ——然ラズ。前カラ借りテイタ人モアルガ、民國二十五年ニ計算シタノヲ帳面ニ書イタノダ。

ソレ以後誰モ一度モ返サヌノカ——然リ。

利子ハ毎年トツテイルカ——然リ。

郝老紀ハ一元バカリ金ヲ借りテイテ、ナゼ返サヌノカ——郝老紀が一元返シタラ、次ニソノ一元ノ借り手ヲ見付ケルノガムズカシイ。

彼ガ一元ノ金ヲ返シタラ、清明節ノ時ツカツテシマエバヨイデハナイカ——ソウスルト金ノ出ドコロガナクナルカ

ラ、元金ヲツカツテシマツテハイケナイ。

二十四元ノ金ノ利子ハ毎年イクラアルカ——七元アル。

とある。しかししてこの前記八人への貸金總計は金二十四圓であつて、郝家會の帳簿の記載額とも一致するわけである。因みに上記の前年の「民國貳拾四年參月初四日立」における貸金總計は四十九圓七十錢であり、民國貳拾壹年貳月拾九日過賬」によれば、貸金總額は二十九圓となつており、年によつて甚だしい増減が見られるが、その間の事情は明らかでない。とにかく郝家會帳に一應上記の如く書かれてはいるものの、清明會當日の報告がすめば、殆んど必要のないものであつて、要するに郝洛振の心覚えの域を出ないものであることは、前記應答によつても知られる如くであり、それはまた郝家會帳の記載年次の飛躍によつても知られると思う。

かくの如く西院の清明會においては、その會計の點において詳細をかくものがあるが、この會の貸金について留意すべきことが二つある。一は會の貸金は同族に對する恩惠的なものではなくして、どちらかといえば義務的なものでさへあるということで、それはさきの返金されたら新しい借り手を見付けることがむずかしいという農民の應答によつても知ることができる。即ち彼等の清明會の經營は、古來、會の基金による利子がすくなからぬ比重を占めているため、舊時の貨幣價值の高い頃には、上記の如き零細な金額も、なおなにほどかの金融的意義を有していたのであるが、われわれの調査當時においては、殆んど金融というには餘りに零細な金額に化するに到つており、そのため以前からの借り主に、殆んど義務的に借り受を繼續してもらつてゐるという實情にあり、従つてこの會の貸金に關しては、郝小小が會地の小作をしているのとは對照的に、すくなくとも現在においては、いささかの恩惠的な要素も存していないわけである。次にいまひとつ留意すべき點は、上に記するところと密接な關係をもつ問題であるが、それは「會」の基金の借主中に、郝姓ならぬ異姓が見出されるということである。即ち民國三十年度においては、「徐老固一元五毛」というのがあり、「郝家清明會」帳によれば、民國二十年以前の年次不記のものにも、借主十三名中、郝

廿十一名に對して劉姓趙姓各一名を消えており、民國二十年には郝姓八名に徐姓一名を存し、「西街清明會賬」によつても、民國二十一年度に郝姓八名と徐姓一名、民國二十四、五年度にも郝姓七名と徐姓一名となつており、さきの年次不記のものに見られる劉・趙の二姓は、民國二十年以後その姓を見ないのに對して、徐姓は民國二十一年以後一貫してその借主中に見出されるのであつて、それが民國三十年度に見られる徐老固であることは明らかである。そしてこのような事實からは、西院郝姓の「公産」とされる「會」の基金は、必ずしも郝姓の同族にのみ限定されることなく、かなり以前から異性にも貸與せられており、従つてそれは西院の郝姓のみを特質づける貸借關係ではないこと、及びすくなくとも現在においては、西院の清明會を維持存續するための利子かせぎの役を演じていることが知られると思う。

本村の郝姓におけるいまひとつの清明會は、南院・北院その他によつて行われるもので、この清明會に關する經理は、郝姓の「寒食會賬」に記されているからして、以下便宜これを「寒食會」とよぶこととする。そして農民はこの寒食會の會員數を八十人と答えているが、これが郝姓南・北院その他の戸數を示すものでないことは、次の應答によつて知ることができる。

清明節ノ日ニ何人位集ルカ——八十人内外。

ソレハ皆男デ、各戸ノ家長ガ集ルノカ——家長ニ限ラヌガ男ダ。

何歳以上デアレバヨイカ——十五歳以上デアレバヨイ。

各戸カラ一人ヅ、カ——何人出テモヨイ。

一戸カラ二、三人出ルノガアルカ——アル。

全然出ナイ家ガアルカ——男ノ人ガオラスト出ナイ。

と。これによれば寒食會の會員は、十五歳以上の男子であればよいとされており、そしてそれは十五歳をもつて成年

と見なす一般の慣習にもとずくもののようであり、従つて會員たるの資格は、必ずしも家長に限定されていないことが知られる。この寒食會の役員には、大頭一名と小頭四名とがあつて、それは寒食會の集會、即ち清明節の當日に出することになつており、その選出方法は抽籤によつて、一年交替の大頭を向う五年間、即ち五人一度に選出することとしているが、小頭はそれと異り、前年度の小頭が次年度の小頭を推薦することになつていて、従つて小頭もまた任期一年ということになる。しかして大頭は後に記する如く、會食の炊事その他「清明節ノ時、中心トナツテ色々ナコトヲスル」ものとせられ、小頭は租糧こさくりようと會錢の利息を集め、また寒食會の買物などを擔當するとともに、それらの事項の寒食會賬への記入、及び従前から記入せられている寒食會賬の保管をするといわれるが、兩者ともその報酬のないことは諸他の地域のそれと同様である。然らばこれら大・小頭と族長との職務上の關係は如何というに、この二院には西院をも含めて、即ち全郝姓で最も輩の高い郝順成とよぶ族長がいるけれども、族長は寒食會には全然關係がなく、族長が大頭となつた時にのみ大頭の仕事をするといわれているから、族長と寒食會とは従前から關係がなかつたといつてよいと思われる。次に寒食會の態様を一瞥するに、清明節の當日、會員一同は村内で集合して、村南の畠の中にある郝鑾とよぶ始遷祖の坟に參拜をする。坟前に到ると大頭が一番先頭にたつて焼紙に火を點じ、叩頭をなし、その他の一同は雜然と後方に並んで參拜をする。上坟がすむと一同は大頭の家に戻り、會員の家から集めてきた椅子を院子に並べ、一脚に二人づゝ腰をかけて會食を行う。

その席次は「北大南小」、即ち南面する家を基準として輩の高いものが北側に、下輩のものが南側に坐ることになつてゐる。會食にさきだち、大頭によつて寒食會の一年間の收支報告がなされ、また時として、即ち従前の會地の小作人が、その年の小作を希望しない時には、會地の小作希望者の有無をたずねることもあるが、その決定は大頭と小頭とによつてされることとなつてゐる。そしてこの會食に用いる茶碗及び箸は、「寒食會賬」劈頭の「舊管」の條に、「會中花碗 七十一個、又存筷子 十五雙」とあるのによつて、もともと會にその備えのあることが知られるが、不

足の分は各自持參するものとみてよいであろう。そしてこの會の目的とするところは、「郝姓ノ者ガ清明節ノ時、集ツテ交驩スルタメノ」ものといわれ、その成立は七・八十年以前と伝えられている。

この清明節における彼等の交驩の會費は、西院の清明會におけると同様に、始遷祖の坟の周圍に存する三畝一筆と、一畝一筆の會地の收穫によるとされていて、西院の郝洛振の述べるところとその畝數において異なるものがあるが、とにかく前者の三畝を郝包子に、後者の一畝を郝洛良に、ともに三年を期限とする定額金納の小作地としている。しかし實際にはその期限は、郝包子においては既に七年目であり、郝洛良もまた五年目であるといわれており、それは要するに、同族中の貧困者に對する恩惠的な小作關係であることによるものようである。即ち小作人郝包子は、西院の郝家會地の小作人たる郝小小の兄であつて、彼等兄弟二人は民國二十五・六年頃、各自五畝づゝを取得して分家しており、家族は本人とその妻と二人のみで、地畝もまたその家族の勞働力も、ともに典型的な貧農といわなければならぬ。いま一人の小作人郝洛良については、ついにその該當者を見きわめることができなかったけれども、わずかに一畝の零細な會地の小作人であるという事實からは、郝包子と同様に零細農家であると認めて誤りはない。要するに會地がかかる貧農に小作せしめられるのは、一般的な小作條件との比において、小作人にとつて確に有利なものであり、そしてそれが同族たることによる恩惠的なものであることはいふまでもない。

いまこの南・北二院における「民國二十五年三月十四日立」の「寒食會賑」の一項をみると、次のように記されている。

民國貳拾九年二月二十七日立

舊管

現洋二十三元四毛五分

郝洛濬名下使洋 六元

郝洛品名下使洋 七元

郝福群名下使洋 六元

郝洛濤名下使洋 五元四角五分

民國三十年三月初九日

新收

郝包子租價洋 二十二元

郝洛良租價洋 八元

原本 洋 二十四元四毛五分

利錢 洋 七元

份子 洋 三元三毛

以上共收洋 六十三元七毛五分

いまこれに若干の解説を付すれば、「舊管」の條下の二十三圓四十五錢(正しくは二十四圓四十五錢)は、民國二十九年二月二十七日現在における郝洛濤以下四名への貸金總計を示し、次の各人名下の金額が、それぞれの借り金の額を示すものであることはいうまでもない。次の民國三十年三月初九日、これは明らかに清明節にあたるが、この日五項目の「新收」があげられている。即ち郝包子の小作料二十二圓、郝洛良のそれが八圓、次項の「原本」とあるは、前年度における郝洛濤以下四名の借り金の總計二十四圓四十五錢であるが、實際にはおそらく返金がなされずに、たゞ帳面ヅラのみの返済であつたと思われる。そして次項の「利錢 洋七元」は、事實納入せられた利子であり、最後の「份子洋 三元三毛」とあるは、寒食會の費用として、「清明節ノ前ニ、各會員カラ金ヲ集メルカ」との間に對して、「集メナイ、不足スル時ダケ集メル、去年ハ份子三元三毛ヲ集メタ」といわれている各戸からの醵出總額であるであ

ろう。

以上が郝姓の西院と南・北二院における清明會の態様であるが、これによつて郝姓の二つの清明會は、ともに僅少なながらも族産としての會地と會錢とをもち、會地は同族中の貧困者に小作せしめて、それに多少とも同族貧困者救援の意圖を寓するとともに、その小作料をもつて清明會の祭祖や會食の資としており、他方會錢の融資においては、これには同族の互助救援の意を存していないものの如くであつて、それはその利率が必ずしもやすすくないことと、また融資の對象を同族に限定していないことによつて知ることができる。従つてそれは、祭祖及び會食の資を得んがための純然たる利潤取得の目的をもつものといわざるを得ないであらう。

ついでをもつて、本村におけるいまひとつの清明會を紹介することとしよう。徐姓の清明節における祭祖は、郝姓と同じく清明會・寒食會・父子會などとよばれるとともに、また「徐家會」ともよばれている。徐姓は郝姓と異つて、同族の二十數戸が本村のほゞ中央部に聚居しているところから、その地域を「徐家街」とよんでいるが、清明節の當日には、徐姓の十五歳以上の男子の悉くが、徐徳和（六十一歳）とよぶ族長の先導のもとに、彼等の老<sup>は</sup>坎に詣ることとされており、もしその年「會」に金があれば「吃<sup>かい</sup>會」をするが、もしなければ行<sup>い</sup>わないと語られている。そしてその吃會の資金は、郝姓と同様に老坎地の周圍の土地四・五畝を、同族や時に他姓のものに小作せしめることによつて得ることとし、民國二十九年にはその老坎地を十六・七元をもつて租地となし、それに各人醸出の一毛錢づゝを加えて吃會を行つたが、それには徐姓の十五歳以上の全男子が出席したため、四十人以上にもなつたと語られている。故にこれによると徐姓は二十數戸であるから、大體一戸二人位が出席するわけで、各人が一毛錢づゝを醸出することとすれば四圓餘となり、これに坎地の租價十數元を加えれば二十元程となり、大體一人四毛乃至五毛を食費にあてうるわけで、物價の比較的低廉な當時においては、そしてまた平常極めて粗食に甘んじている農民にとつては、これをもつて一應の御馳走と稱し得る程度のものを賄い得たと思われる。會食に用いる卓子や椅子は、郝姓の如く備え

をなさず、隨便に院子内の適當な場所に、あるいは立ちあるいは腰かけ、あるいはまたアンペラの上などに坐したりして食するのであつて、従つてかゝる會食の仕方においては、郝姓の如く輩の高下によつて席を定めることはできないわけである。會食の場所は不用意にもきゝもらしたが、徐姓にもまた「大頭」や「小頭」が存しているようであるから、おそらく郝姓と同様に「大頭」の家で行われるものと考えてよからうと思われる。しかしこの會食は、「會」に金のある時のみ行ふといわれるが、この「會」の金は、老坎地の小作料を主たる財源とするもので、それが定額の金納小作料であるため、いきおい物價の高低に應じて會員の負擔に増減を生ずるわけで、従つてその負擔が甚だしく増加する場合には、會食は行われがたいこととなるが、小頭の一人の語るところによれば、大體毎年行われているようである。

これを要するに徐姓の清明會は、郝姓との比較においては同族の數が少く、従つてまたその規模も小さいといわなければならぬ。また會地の小作も必ずしも同族に限られてはいないようであつて、従つてそれは同族の貧困者に對する恩惠的なものというよりも、むしろ吃會の費用を得るためのものと見るべきであらうし、また郝姓の如く會食用の備品もなければ、會食の席次に論輩も行われないなどの諸點からは、郝姓に比して徐姓の同族結合は微弱であるといへないでもない。しかし本村には上記郝姓や徐姓のほか、趙・王・劉・李・張等の諸姓が存しているけれども、これらの諸姓は郝・徐二姓に比して數的に寡少であるとともに、また上記の如き形における共同の祭祖も、また同族會食の行事ももたないのであつて、その意味では郝・徐の二姓は、すくなくとも本村では特記すべき同族關係をもつものといふことができると思う。

以上欒城縣寺北柴村の郝・徐二姓における清明節の祭祖行事を紹介したのであるが、この二姓の祭祖行事を比較すれば、大體次のように要約できるのではないかと思う。即ち

一、明らかに同村に居住する同族である郝姓が、地域的に分れて聚居する支派によつて、すくなくとも二つに分れ



て別個に祭祖を行つてゐるに對して、徐姓は全族が一地域に聚居してゐるとともに、その祭祖もまた全族が合同して行つてゐること。

一、二姓ともにそれぞれ數畝の會地をもち、一はそれを同族中の貧困者に小作せしめて、多少とも同族救済的な意圖を存しているに對して、他は必ずしもそうした意圖を明確にはしていないけれども、ともかくいずれにしても、會地の小作料をもつて清明會の主たる財源としてゐることは共通である。

一、郝姓には清明會の基金を存し、その本錢は同族及び他姓に融資して利錢をかせぎ、その利錢をもつて清明會の補給金としてゐるのに對して、徐姓には本來かゝる基金を存せず、ために清明會は會地の小作料と、會員の醸出金とをもつて賄つてゐること。

一、二姓ともに大頭・小頭とよぶ清明會の役員を有し、それが會の主導的な役割を演じて、族長や支派の長はすくなくとも清明會においては、殆んど特記すべき役割を演じてゐないこと。

一、會員として會食に出席しうるものは、十五歳以上の男子に限るとされてゐること。

一、會食の席次は論輩によるものと然らざるものとあること。

一、本村には郝・徐二姓以外に、趙・王・劉・李その他の諸姓を存しているにかゝらず、清明會を營むものは上記の二姓のみであること。

いま上に要約したところを一應の基準として、これと大同小異の同族の祭祖行事を、他の二、三の調査村落について瞥見することとしよう。順義縣沙井村は、楊・張・李・杜・劉・孫その他の數姓をもつてなる七〇戸ほどの村落であるが、そのうち清明會を行つてゐるのは、楊姓一三戸、張姓一二戸、杜姓七戸とのみである。まず張姓の清明會をみるに、その有する一畝の會地を同族中の極貧者に耕作せしめ、張姓各戸から一人づゝが出て行かう清明の日の上坂がすむと、會地の耕作者、即ちこの地でもやはり清明值年または辦清明會的とよばれる會地の耕作者の家で、一同が會

食することとなつてゐる。そして清明値年はこの會食に對して、豆腐・白菜・麵・酒などを提供することとされてゐるが、それは勿論會地の小作料の代償的意味をもつものである。因みに民國三十年度には、この費用約十元を要したといわれるが、會地には谷子<sup>あわ</sup>または黍子<sup>もちきび</sup>が作られ、毎年ほど一百斤、金にして約五十元の收穫があげられているからして、この會地の耕作が極貧者に對する恩惠的なものであることはいうまでもない。會食がすむと、會食の費にいくら要したかを清明値年にたすね、あまり多額に要した時にのみ一同が醵出援助することとし、またこの席上、明年の清明値年を誰にするかを協議することとされているが、實際にはこゝ數年來耕作者が一定しているのは、現在の耕作者が同族中の極貧者であることによるものである。また本村の楊姓の清明會においても、やはり各戸から一人づゝが出て、相互に門口で呼びあうて一同打揃つて上坎をなし、坎に土をかけ、植樹をなし、また供物をして、上坎がすむと清明値年の家で會食をすることとなつてゐる。坎地は二筆で二〇畝といわれるが、耕作可能な土地は四畝乃至五畝であつて、これを同じく同族中の極貧者楊永瑞なるものに耕作せしめ、その小作料のかわりに清明會の會食費を負擔せしめてゐる。會食費は一人あたり六、七毛程度で、十三人合計六元か七元あれば事足りるといわれている。いまついでもつて、楊永瑞の會地即ち祭田耕作の契約書、即ち楊姓の「合族公單」を紹介し、もつて一般の祭田耕作の規約を窺ふの資とすることとする。

楊姓の合族人等、辦清明會の公單一を立つること。いま西門外の祖塋一端、南上坡地二畝、西上坡十八畝、共に計二十畝を修理するにより、合族人等議定すらく、毎年清明の佳節には、祭田の利をもつて祭奠す。その祭奠の花費<sup>ひよう</sup>の外に餘りあらば、仍ち承種の人に歸し、清明の午飯一頓に預備す。議定すらくこの十八畝は、楊永瑞の承種に歸し、清明の供品・午飯一頓に預備す。承種は六年を限りとなし、後は再議を要するとする。もし(坎の)破土や偷土などのことあらば、自ら合族人等の干涉究辦するあり。これ合族人等一體の尊理誠意にかゝる。後に退縮爆棄して、人の整理するなきを恐れるの故に、この公單を立てゝ證とする。

合族人等、會を開いて議定すらく、清明に修理すること一日、六月十五日に修理すること一日、九月十五日に修理すること一日、このこと議定せるところの禮なり。この日ひとしく會廠に到り、誠意工作せよ。もしこの日會廠に到らざれば、罰として公麵一頓を受く、會章に違犯するを准さず。まさに希うらくは、族中の義は乃ちこれ人道の常なることを。

楊永萬 惡	楊春旺 惡
楊少增 平	楊源 匪
楊永林 惡	楊名旺 田
楊永瑞 惡	楊正 惡
楊永元 中	楊□ 惡
	楊澤 忠

中華民國二十九年古暫二月二十八日立公單人

代字人 楊潤 惡

この「合族公單」に若干の解説を付するとともに、上に記するところの不備を二、三補つておきたいと思う。「西門外」は村の西門外の意。また「祖塋一端」の「端」は音 *tem* で段 *tem* と同じ。「南上坡」「西上坡」はともに坟の所在の小字名。楊姓の有する坟地二筆二〇畝のうち、二畝は村の東方を經過する京古線沿線にあり、西上坡の一八畝中にいわゆる「祖塋」「祭田」を有しているのであるが、前者には始遷祖の坟一基と、年代不詳の晩輩にして少亡(夭折したもの)の坟一基とを存していた。しかしてこの始遷祖の坟とは別に西上坡に一八畝の坟地が設けられたのは、その昔、陰陽先生によつて、爾後始遷祖の坟に埋葬することは吉祥でないとされたことによるものである。また上記公單に「午飯一頓」とあることによつて、彼等の上坟が午前に行われること、さらにまた清明値年には、毎年の清明節以外に、舊曆の六月十五日と九月十五日の年三回に、墓の修理が義務付けられていること

が知られる。なお上の公單は民國二十九年に立てられたもので、これは楊永瑞が清明値年、即ち祭田の承種をすることとなつた時に書されたのであるが、それは「今マデコレガナカツタメ、畝數ガ足ラナクナツタコトガアルノデ、コレヲ作ルヨウニナツタ」といわれている。(中國農村慣行調査第一卷、二六三頁以下參照)。

上記順義縣沙井村の張・楊二姓の清明會は、さきに見た欒城縣寺北柴村の郝・徐二姓のそれと、その規模において多少の差異があるとしても、大體において同巧異曲のものであることが知られるのであつて、それはまた、華北における諸他の村落についてもいうことができるのであるが、以下前記の事例とは、その規模や組織や條件その他の點において、やゝ趣きを異にする若干の事例を、調査村落の中から拾つてみることにしよう。

上に紹介したところは、いずれも毎年の清明節に祭祖の行事を営むものであつて、またその故にこそ清明會とか清明値年などと稱されているのであるが、次の事例は毎年正月二日に行われるものである。即ちそれは山東省恩縣後夏寨(津浦線德縣の南方四十軒ほどにあり)におけるものであつて、彼等によれば正月二日は、過年おへみさかに家に歸つた祖先の靈を祖坟へ送り返す日とせられ、従つてそれを「送爺々娘々」と呼んでおり、また一般にはこれを「家譜社」とも稱しているが、それはこの村落の若干の同族が、「老祖宗」とよぶ家譜かふのようなものを、年毎に按家按戸、即ち同族の軒並みに順次輪流して參拜する慣習があるからであつて、またかゝるところからこの家譜社に姓を冠して、馬姓ならば「馬家譜社」という風にもよんでいる。本村は全戸數一二三戸のうち、王姓四七戸、馬姓三〇戸、吳姓一六戸、李姓九戸、魏姓六戸、張・劉・田の各姓それぞれ四戸、孟・徐・趙姓各一戸となつており、これらの諸姓のうち「同族ノ共有地」、この地で通常祖塋地・祖田などによばれる祖坟地内やまたその周邊に耕作可能な土地をもつものは、王・李・吳・田・馬などの諸姓であるが、正月二日の「送爺々娘々」の後、農民が「公飯」あるいは「夥飯」とよんでいる同族の會食をなすものは、ひとり馬姓のみである。馬姓は村内のあちこちに散居して聚居の形態をとらず、また通常一般に同族とか同宗の語をもつてよばれている血縁集團を、この地では、すくなくとも馬姓においては「院裡」と

稱しており、血縁集團としての支派は構成していない。彼等における正月二日の送爺々娘々には、いわゆる院裡のものが一同で上坎して「送神」をなし、それがすむとその年、老祖宗の輪流にあたつた家で會食をすることとなつてゐる。出席者は一家一人づゝで、もちろん女子は出席しない。會食に供されるものはマントー・白菜・猪肉などで、會費は一人あたり二毛錢位とされている。馬姓は本來三、四畝の祖塋地を有しているけれども、それは同族の貧困者に「白種」させているため、他地方のその如く、祖塋地からの収入を得ることができない。白種とはその名の如く小作料を免除することであつて、かゝる耕作者乃至その家を「白種戸」と呼んでいるが、同族の貧困者救済という意味においては、前記の諸例よりもさらに徹底したものといふことができる。たゞし正月二日の上坎祭祖の時には、焼紙・爆竹・線香などを買ひ整えることが課せられている。また馬姓には會食のための基金を存していないため、補給すべき財源がなく、いきおい各人釀出の會費のみで賄ふなければならないが、會費は當初から定められてはゐず、會食後に「一家一家ノ割當額ヲキメテ出ス」こととされており、従つて年毎に多少の變動があるものと見なければならぬ。またこの會食の席上、次の年の白種戸を誰にするかも相談せられるわけである。

以下本村において、同族の共同祭祖は行ふけれども、會食を行わない若干の同族について略敘すれば、魏姓六戸の祖塋地は、坎が多くて耕作地を存しないけれども、坎と坎との間の一畝程を、魏姓六戸の輪流を原則として耕作し、毎年谷子三、四斤、當時の價格にして五元か六元の收穫を得ている。しかし六戸の輪流というのはその原則であつて、實際には「新年ノ二日ニ耕作者ヲキメル時、富ンダ人ノ番ニナルト、貧シイ者ニ讓ツテクレル」ものゝようである。また事實その實例も存している。祖塋地の耕作者は、勿論小作料という程のものは徴收されないけれども、正月二日に二元と、清明節に一元とを族長に出し、族長はそれをもつて焼紙と線香とをかうこととされており、その他に耕作者には、正月と清明節とに祖坎の修理が課せられている。正月二日には朝六時頃、魏姓六戸からすくなくとも一人づゝは出て、族長の家の前に集つて一同が上坎する。上坎がすんでから再び族長の家に歸り、その年の祖塋地の耕作者

を話しあいの上きめるのであるが、それは「數分間、一寸話ヲシテスグ歸ル」程度のもので、それがすんでから各自の坟に詣るとされている。吳姓一六戸には輪流即ち年々もちまわりの老祖宗があり、正月二日の朝は、その年、老祖宗の輪流された家に集つて、それから一同で祖坟に詣るのであるが、祖坟では族長がまず線香を供え、それから各自隨便に線香をあげて参拜をする。上坟が終わると各人自分の家の坟にまいり、家に歸つて拜年(新年の挨拶)にくる人々の接待をする。吳姓の祖塋地は二畝足らずで、これを同族中の貧困者のひとりに耕作せしめ、耕作者はそれに高粱・麥・包米・谷子などを隔年に作り、毎年谷子にして約百斤、金にして二十元位、豊年には二百斤近い收穫をあげているといわれる。そしてこの白種戸に課せられる負擔は、毎年正月二日の上坟祭祖の時に、燒紙・爆竹・線香などを買いとゝのえることであつて、それに約十元を要するとされるからして、平年ならば十元、豊年には二十元くらいが白種戸の利得ということになる。この吳姓にもまた同族會食の行事がない。なおこのほかに、本村で最も多數を占める王姓と、また李姓とがある。王姓は「前院」と「後院」、また「東胡同王」と「西胡同王」とに分れ、一見地域的に聚居する支派關係を構成するものの如くであるが、實はいくつかの不同宗の王姓のあつまりにすぎず、特筆すべき同族關係が見出されない。また李姓九戸中の六戸の同族においても、さきに見たところの諸姓と大差はなく、たゞ祖塋地二畝が二分されていて、一畝を五戸が共同して耕作するのに對して、他の一畝は一戸のみで耕作せられ、同族中の貧困者に耕作せしめることのない點のみが特筆さるべきであらう。そしてそれは當初、李の祖先に兄弟二人があり、それが分家によつて祖塋地を二分し、その後その一方のみが五戸に分家したことによるもののである。しかしてこの王・李二姓とも、會食を行わないことはいうまでもない。

上記の如く華北の諸他の地方においては、同族の祭祖行事が多く清明節に行われるのに對して、この地方では正月二日に一定して行われているという意味で、すくなくともわれわれの調査地域に關するかぎり、一應特記すべきものといふことができ、また他地方のそれが、多く坟墓のみにおける祭祖、ないしはその附加的なものとして、

たかだか家譜を有する家への隨便な參拜であるのに對して、本村では墓祭のほか、「老祖宗」とか「家堂祖圖」などが、按家按戸の輪流によつて祀られているのであつて、これもまた特記すべきもののひとつといふことができると思う。

以上は清明節または正月二日に行われる祭祖行事であり、またその行事の一部をなす同族の會食であるわけであるが、上記がいずれも同村内の同族のみによつて行われるのに對して、次に紹介する事例は、二村あるいは三村の同族が合同して營むところの祭祖である。河北省安次縣東王莊は、北京天津間の良坊站の西方二軒餘のところであり、全村一八戸のうち一戸の趙姓を除くのほか、悉く同宗の王姓からなる小部落であるが、本莊古老の言によれば、今から二四〇年前の康熙年間に、本莊東南二、三軒の史家務という村落から、該地が人多くして地寡きの故をもつて、當初二戸がこの地に移住してきたといわれ、現在はその第一門が二戸、その他は悉く第二門となつてゐるが、これはおそらく移住當初の二戸の分派であると考えられる。この王姓における祭祖は次の如くである。即ち清明節の當日早朝、王姓の出身地たる史家務に現存するたゞ一戸の王姓——それは大人ひとりと子供三人のみからなる家族である——が東王莊にきたり、朝食を東王莊の王姓と共になし、それがすむと八時頃に兩村の老幼の男子凡そ二百名ほどが、族長や老人たちに先導せられて、史家務の古坟にいくこととされている。もつとも現在の族長は八十六歳の高齢であるため、天候のよい時にのみ出かけ、不良の時にはいかないといわれるが、とにかく一同が史家務の古坟に着くと、各自持參した鐵銑をもつて坟に土をかけ、楊樹や柳樹を坟の周圍に植え、マントー・點心・燒紙・線香の類を坟に供える。以前は爆竹もならしたが、日華事變以後はこれを行わない由である。そして族長の指揮のもとに老人は前に、年青(若い者)は後に立つて坟に叩頭し、十一時頃史家務の王姓とともに東王莊に歸り、吃會即ち會食を行うこととしている。翌日もまた同様に、史家務の王姓も加わつて朝食をなし、今度は東王莊から正南一軒半の地にある河北、即

ち龍河とよぶ川の北にある古坎に詣り、それから歸つて午後會食を行う。かくの如く王姓は二日間に互つて、異なる二ヶ所の祖坎に詣るのであるが、その會食には一人の「香頭兒」とよぶ幹事の如きものがあり、それは他地域のそれと同じく輪流值年で、その輪流の順番は、按輩即ち同族全體の世代の高いものから低いものへとまわり、もし世代同一の者が存する時には、年齢の多いものが先番となるとされている。

そしてこの香頭兒は、王姓が光緒年間に吃會用として備えた碗二百と、箸百二十人分とを保管するを任としている。なお故老によると、この吃會は本來食事のみを目的とするものではなく、全王姓の集會親睦を目的とするものであつて、現在は白菜と小米飯あわめしを食するにすぎないが、光緒年間には白麵と肉とを食したと語られている。しかしこの會食に參する人數は、毎年二百人ほどを算し、従つて香頭兒の保管する百二十人分の箸のみでは不足するわけであるが、その不足分は「喰べ終ツテカラ人ニ貸ス」ことによつて補われている。そしてこの吃會は民國三十一年には不作のため行わなかつたが、民國三十一年には二日間に約五百元を費して催したといわれる。しかしその財源は他地方のそれと同様に、本莊で「上坎地」とか「祭掃地」とかとよばれる坎の周邊の耕作地の收穫によつてゐる。坎地は各地に散在しており、總計五四畝六分の一を有するけれども、そのうち實際耕作可能な土地は河北の老坎地にある一五畝ほどで、これを前記の如く按輩による輪流、即ちその年の香頭兒が一年づゝ耕作することとなつてゐる。故に兄弟が分家して二家以上となつた場合には、本人たちの協議により、そのうちの一家のみが香頭兒となることとされており、これは祭祖に伴う負擔と祭掃地よりの所得とを、同族全體の立場から均衡ならしめるためのものと理解される。この祭掃地の小作は、分種即ち分益折半の形をとつており、收穫は一畝につき三斗ぐらいといわれ、従つて耕作可能地全體からは四十五斗ほどの收穫があるものと見られ、民國三十一年度には約八百元の收穫があつたといわれるからして、その分益折半による香頭兒の収入は四百元ほどであり、そのうちから祭掃地の税をおさめ、上坎に用いる焼紙や線香や供物を求め、さらに吃會の費用にあてゐるわけであるが、民國三十一年度の如く二日間に五百元を要した



ということになれば、明らかに百元以上の不足を生ずることとなる。一般に凶作その他によつて小作料に甚だしい不足を生じた時には、その年の吃會は朝食のみにして、午飯を食しないことによつて不足を賄うといわれ、またもし豊作によつて、あるいはまた吃會を朝食のみとして剩餘金を得た時には、それを翌年の吃會の費に充當することとし、その間その剩餘金は同族人に貸與して、その利錢をかせぐこと諸他の地方のそれと同様である。そしてこの祭掃地の小作料納入者の氏名と金額、吃會に要した諸物資購入の費目や金額數量、また貸付けた金額や借主の氏名などは、その年の香頭兒によつて、日附とともに明細に「五興堂記 出入流水」の帳に記して保存されているが、その記載の體裁は、前記欒城縣の郝姓のそれと大差はない故、こゝには省略に従ふこととする。<sup>(1)</sup>

(1) 「五興堂記 出入流水」は民國三十年三月十八日より記入せられた新しいものであるが、この帳を私に示した村の古老王徳先は、次のような説明をしている。今から三十八年前、王姓の排行字「徳」の輩が生存者の最高世代を占めた時、王徳先の父の祖父である世輝・世燿・世奎・世珍・世斌の五人の兄弟があつたところから、まず「五」の字を付し、さらに「徳」の孫の輩の排行字が「興」であるところから「興」の字をとり、かくて「五興堂」と名付けた。そしてかゝる堂名は、あたかもわが國の屋號の如く、否はるかにそれ以上一般的に、通常農家に用いられている。

(2) 華北農村慣行調査資料第一一輯(家族制度篇第一二號)參照。

上記東王莊の王姓は、ともかく二村の同族が合同して清明節に祭祖を行うものであり、その同族戸數の僅小なのに比して參加人數も二百人といわれ、祭田も一五畝、費用も五百元を要したといわれていて、諸他の調査地のそれより遙かに盛大なものといふことができるが、次に紹介するところは、さゝやかな家廟以外には祭祖の財源としての祭田を有せず、しかもなお三村に跨る同族が、古來共同して祭祖行事を營むものであり、その祭祖の日もまた清明節ではなくして、十月一日の「送寒衣」の日に行われている。山東省歷城縣の縣公署所在地たる王舍人莊の周邊大體二村乃至三村のうちに、即ち王舍人莊を三角形の重心として、そのほゞ頂點と思われるところに、楊家屯・路家屯・殷家莊

の三村莊が存在し、この三村に楊姓の同族が散居している。いまこれを「楊氏族譜」(大清嘉慶二十三年刊)の序に徴すると、

(前略) わが楊氏が襄強から遷發して以來、今に到るまですでに十有一世である。第一世の始祖の諱は重陽といひ、歴城の楊家屯に遷り住んだが、遷居して何年になるかすでに考うべきものがない。第四世と五世において、分れて八支となり、本莊におるものは(上記三村莊をいう)、(中略)祭りの節に逢うごとに、三莊のものがみな集り、おの歡心を展べることにしている。それは一つにはもつて先靈を安んじ、一つにはもつて族人に睦するためのもので、まことに盛舉である(下略)。

とある。しかしして現在楊家屯の楊姓は百數戸、路家屯のそれは二十數戸と算せられるが、殷家屯のそれは審かにしない。と路家屯の楊姓によつて語られている。とにかく現在これら三村落には、それぞれ別個に族長が存在していて、三村莊共同の族長というものは存していない。従つて同族たることを儀禮的に表示する族長に對する拜年も、三村莊に跨がる楊姓の行事としては行われていず、さらにまた彼等がこのような事情にあるため、すくなくとも路家屯の楊姓においては、僅々二、三軒を出ない殷家莊の楊姓の戸數も知らないというような關係にもある。このように母村を越えて同族が擴大分派し、そしてその世代が降下すると、昔時の血縁關係も、またそれにまつわる傳承もうすれて、各村莊に分派した同族が、それぞれの地縁的な關係にも裏付けられて、自然に分離獨立の傾向を助長していくことは必然的であつて、楊姓が近村に散居しているながら、三村莊共通の族長を有していないのも、まさにその一證といふべきであらう。しかしながらかくの如き楊姓にも、なお一つの顯著な同族としての關係が残存しているわけであつて、それが即ち彼等における祖先祭祀の行事である。そもそも楊姓最初の遷居の地とされる楊家屯には、楊姓の始祖以下を祀る家廟が存しており、毎年十月一日の鬼節には、路・殷二莊の楊姓の代表者三、四名と、楊家屯の楊姓多數とその家廟に相會して、焼紙と線香と茶はかすや酒を供えて、祖先の祭祀を行うといわれている。これを前記の楊氏族譜の序

は、「祭りの節に逢うごとに、三莊のものがみな集り、おのおの歡心を展べる」と記しているわけであるが、現在は、路・殷二莊に關するかぎり、僅かにその代表者三、四名を派しているにすぎず、族譜の記するところとはその規模において、甚だしく縮減されたものといわざるを得ないが、なおその限りにおいて祭祖行事は行われているのであつて、その目的とするところが、「一つにはもつて先靈を安んじ、一つにはもつて族人に睦する」にあることはいうまでもない。

なおこのほかにわれわれの調査村落のうちで、他村の同族と合同して祭祖行事を營むものに、順義縣沙井村の杜姓がある。杜姓は沙井村に七戸、隣村の石門村に二戸、植柳樹村に一戸とを存しているが、すくなくとも沙井村と石門村の杜姓とは相合して、共同して祖先の祭祀を行つてゐる。この杜姓の老坎地は六畝といわれ、そのうちに耕作可能な土地が五畝ほどあり、これを同族中の極貧者に、その父の代からひきつゞいて耕作せしめ、毎年清明節の上坎がすむと、同族がこの老坎地の耕作者の家にきたつて、辦清明會即ち清明節の會食を行うこととしている。もつともその詳細なことは明らかにしないけれども、本村の張姓や楊姓のそれと大差ないものとみて誤りはないと思う。(未完)